「支那観」のこと

JJ1SXA/池

以前の記事、単騎シベリア横断「福島安正」(28,Nov,2013 記)で福島安正の「隣邦兵備略…1880 年」、脱亜論(31,Jul,2013 記)で福沢諭吉の「脱亜論…1883 年」のことを書きました。

支那人の本質に触れる話ですが、今回は、この後の 1913 年に書かれた、内田良平の「支那観」のことです、内田良平の見た、支那人の特徴です、(一)平気でウソをつく、(二)平然と恩人を裏切る、(三)歴史事実を故意に改変する、(四)約束を守らない、(五)身内・仲間は大事にするが、「外部」は騙す、(六)敵を分断し、陰謀を常に仕掛ける、(七)自分本位に思考し、自己利益のみを追求する、(八)社会構成が「聖人主義」であり、平等思想を認めない、(九)地位についたものは地位を利用し私服を肥やす。

いやはや、現在の中国人にも同じことが、当てはまる内容だ。

最近、中国共産党の大物である前政治局常務委員である周永康と一族そして関係者が、汚職などの罪で軒並み逮捕された。

周は石油関係利権を握り、彼と一族郎党の集めた資産は、日本円にして一兆数千億円に上るという。

習主席は、「トラもハエも同様に叩く」という汚職摘発・綱紀粛正の原則方針に基づいて、周一族摘発を断行したのだと喧伝しているが、習氏本人の姉は不動産関係の利権、弟は環境ビジネスの利権を握っている。

恩家宝前首相も、数千億円の蓄財があるとアメリカ誌にすっぱ抜かれていた、李鵬元首相は電力利権を握り、王震元副主席は軍需利権を握り、蓄財に励んでいる。

江沢民元国家主席も自身とその一族は、何らかの業界の元締めであり巨額の財を蓄えていることは、もはや公知の事実。

福島安正の「隣邦兵備略…1880 年」で書いている「清国の一大弱点は公然たる賄賂の流行であり、これが百悪の根源をなしている。

しかし清国人はそれを少しも反省していない。上は皇帝、大臣より、下は一兵卒まで官品の横領、横流しを平然と行ない、贈収賄をやらない者は一人もいない。これは清国のみならず古来より一貫して変わらない歴代支那の不治の病である。このような国は日本がともに手を取ってゆける相手ではありえない。」の通り、(九)の「地位についたものは地位を利用し私服を肥やす」は、連綿と続く事実。

脱亜論の「…亞細亞東方の惡友を謝絶するものなり」が正解だろうと思うが、尻尾を振りながら、いそいそと訪中詣での政治家が多い、中国人の本質を知ってのことか、いい加減にしろと言いたい。

(6.Aug,2014 記)